

2020年4月26日（日）「インマヌエルなるイエスの号令」

マタイ 28:16-20

16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。17
そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。18 イエスは近
づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威
が与えられています。19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。
そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、20 また、わたしがあなたがたに
命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつも、あなたがたとともにいます。」

【序論】

いよいよ今日でマタイ福音書の講解説教は最終回となります。振り返りますと、2014
年8月17日からスタートし、およそ6年かかり、回数としては197回になりました。
28章まででありながら結構な数になったことに、我ながら驚いています。中でも特に
時間をかけて学んだ部分は、5～7章の「山上の説教」でした。そこで語られていた
のは「神の国の倫理」であり、キリスト者はとてつもなく高い倫理的な生活が求められて
おり、むしろそのような生きることが当然の存在なのだということが教えられました。
主イエスの様々な教えが脳裏を駆け巡りますが、譬話や終末的預言などを含め、私たち
はこの6年間学んできたことを自分の生き方の使信として歩み続けていくのです（マタ
イが終わったらそれっきりということではありません）。また、今日の箇所は「大宣教
命令」として知られており、これまで示されてきた生き方を、あらゆる時代・あらゆる
場所を通じて教会が宣べ伝えていく使命をもって締めくくられます。

【本論】

本論1. 礼拝と疑い

しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。そして、
イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。（28:16-17）
まず、この出来事（復活の主と弟子たちの再会）がいつのことであるかを考えてみる必
要があります。復活の主が最初に弟子たちと出会われた場所はエルサレムであったはず

ですから¹、田舎のガリラヤに戻ったのはその後のことでしょう。マタイ福音書ではあたかもここガリラヤにおいて初めて主イエスと弟子たちが出会ったかのように書かれていますが、実際には既に再会を果たし、何度か交わりをもった上での話なのです。

主イエスは弟子たちをどこの山に招かれたのか、正確なことは分かりませんが、山上の説教を語った山 (5:1)、かつて変貌を遂げた山 (17:1) など、幾つかの説があります。いずれにせよ、山は神がご自身の民に現れる場所であり (出 19:11-25)、民はそこで神からの啓示を受けてきました。主はここで、かつて神が旧約の民にモーセを通して律法をお与えになったように、弟子たちに新しい教えと命令とお与えになったのです。

私は花粉症であるため、なかなか積極的に山に登れないのですが、コロナが終息したら教会の皆様と一緒にどこかの山に登ってみたいと思っております。子どもの頃の記憶として、コーウィン先生に連れられて城山 (相模原市?) に登ったのを思い出します。先生としましても、そこで主の教えを語るという目的を持っておられたのでしょう。

17 節には興味深い記述があります。集まった 11 人の弟子 (イスカリオテのユダを除く「十二弟子」) の中に、主を礼拝した者と疑った者がいたというのです。先にもお伝えしましたように、この弟子たちは既に復活の主と何度か出会ってきているわけですから、今になって疑うとはどういうことなのかと疑問を抱かざるをえません。確かにトマスは自分が不在のときに主が他の 10 人の弟子たちに現れたと聞いても、「**私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません**」とこだわりましたが (ヨハネ 20:25)、それも過去の話です。彼はその後、「**私の主。私の神**」と言って主イエスを礼拝したのです (ヨハネ 21:28)。

「疑う」と訳された単語は「**διστάζω**」で、原意は「疑う」で間違いないのですが、ある英語の翻訳では「hesitate」(ためらう) を採用しているものもあります。復活の主と出会い、直ちに礼拝した者もいれば、すんなりといかなかった者もいたようです。考えられる理由は、主イエスの姿がかつてと随分違っていたということ。エマオ途上の二人の弟子たちも、一緒に歩いているのが誰だか分からなかったのです (ルカ 24:16)。つまり、復活から昇天への途上にある主の姿は、栄光のからだに変わりつつあり、以前と見分けがつかなかったということなのでしょう。弟子たちは、信じては疑い、疑っては信じ…ということを繰り返していたのだと思われます。これは、私たちが何度も「自分は本当に救われているのだろうか」と不安になるのと似ています。

¹ ルカ 24 章では、エルサレムから 11km ほど離れたエマオという村への途上で主が二人の弟子に現れ (24:13-35)、この二人の弟子はエルサレムに戻って十一弟子に合流したところ、その集まりの中に主が現れたとされている。ヨハネ 20 章では、主が弟子たちの所 (おそらくエルサレム) に来られたが、そこにはトマスだけが居合わせていなかったため、後で主がトマスのために改めて来てくださったと書かれている (20:19-29)。更に 21 章には、ガリラヤ湖 (テベリヤ) において漁をしていた弟子たちに主が現れ、その湖畔でペテロを再召命なさったという記事がある (21:1-23)。今日のマタイの箇所は、おそらくこれら一連の記事の後の出来事を指している。

本論 2. 大宣教命令

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」(28:18-20a)

少し離れた所で様々な態度を取っている弟子たちに、主イエスの方が「近づいて」来られました。この「愛の接近」は、弟子たちの心から疑いを取り去り、確かにこの方は主イエスご自身であるとの確信を与えました。その上で、主は弟子たちに偉大な命令をお与えになります。この命令は、その後の全キリスト教会に向けられたものとも言えるでしょう。この「大宣教命令」には4つのポイントがあります。

- | | |
|--------------------------|---------------|
| ①主イエスには今や宇宙的権威が与えられている | } 前提
命令の内容 |
| ②全世界を教区とせよ | |
| ③三位一体なる神の御名によってバプテスマを授けよ | |
| ④神の国の倫理に生きるよう教え導け | |

まず、「①主イエスには今や宇宙的権威が与えられている」ですが、主は地上の公生涯においても、確かに「権威ある者」(7:29) であられました。しかし、その権威は制限されたものであり、マタイ福音書では「ダビデ王家の継承者」(1:1-7)、「まことのユダヤ人の王」(2:1-12)、「エルサレムの王」(21:1-11)、「神の子キリスト」(26:63)、「ユダヤ人の王」(27:29, 37) などの称号が所々に与えられてきました。しかし、ここでは一切の権威をはるかに超える「宇宙的権威」が主イエスに与えられている。19 節の冒頭に「それゆえ」という接続詞が付いているように、主イエスが万物の支配者であるということがすべての前提となって、以下3つの命令がかけられていくのです。

「②全世界を教区とせよ」。かつて主は弟子たちを伝道旅行に遣わすにあたり、「異邦人の道に行ってはいけません。サマリヤ人の町に入ってはいけません。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい」(10:5-6) と言われました。しかし、今やこの制約は取り払われ、世界規模の宣教命令が与えられています。まずイスラエルが救いの基礎とならなければならなかった。十二弟子とはイスラエルの代表でありました。基礎がしっかりと築かれた上で、福音は広く発信されていくという順序があったのです。「弟子とする」とは、主イエスに学び、その御旨に従う者を興していくことです。そのためには、まず弟子たちが福音に生きる自由を生き生きと味わう必要があるでしょう。神の国の倫理に生きる喜びと、そこから生まれるあらゆる「回復」の御業を事実として示し、そこに希望があることを伝えていくのです。私自身も、救われてから一つひとつ、自分が過去に壊してきた人間関係が修復されるという経験をしてきております。

「③三位一体なる神の御名によってバプテスマを受けよ」。信仰を持った人には、三位一体なる神の御名によって洗礼を授けます。「父、子、聖霊」という、一人の神の内
に存在する三位格の定型表現が早くも出現してきていますが、この「御名によって」は直訳すると「名前の中へ」であり、神への忠誠の中に入っていくことを意味します。洗礼は、キリストとの結合、キリストへの献身のしるしであり、信者は主イエスと生死を共にする一体関係に入ったということなのです。

「④神の国の倫理に生きるよう教え導け」。弟子となった人は、そこから信仰者としての第一歩がスタートするのであり、絶えず学び続けなくてはなりません。伝道と教育は常に車の両輪のようにバランスが取られている必要があります。教育がなければ、福音に生きるということがどういうことなのかが分からず、何を伝えればよいかの知識もまだ備わっていないでしょう。しかし、学んで自分の中に知識を溜め込むだけでも信仰は成長しないのです。証しし、誰かに伝え、信仰に導くことを通して、その人自身が大きく成長させられていきます。

本論 3. インマヌエルの約束

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(28:20b)

いよいよマタイ福音書最後のフレーズです。宇宙的権威を持つキリストが「世の終わりまで」「いつも」「共にいる」と約束してくださっている。主イエスは1章で「その名はインマヌエルと呼ばれる」と預言されていました。「インマヌエル」とは「神は私たちと共におられる」という意味であり、聖書全体の目的と言えます。人類は元々神と共に歩み始めました。しかし、神から離れた道を進み出し、それによって人間も世界もおかしくなっていく。神はご自分を捨てた人類と尚も共にあろうとし、神の民の系図を絶えず残しながら、神と人との関わりが途絶えることのないよう歴史を導いてこられました。そして、ついにこの「信仰の系図」から主イエスが誕生し、インマヌエルの神ご自身が世に現れたのです。この方はすべての人のために苦しみ、命を捨て、復活によって死を打ち破り、聖霊によって信じる人の内に住んでくださるようになりました。信じる人は「神の神殿」と呼ばれ、まさしく神の住まいとなるのです。

この後、キリスト教会はローマ帝国による大迫害を経験していきますが、この苦難の日々、信徒の群を支え続けたのはただ復活の主との結びつき、インマヌエルの主が共におられるという約束でした。

私たちの人生にも、喜びの日々だけではなく、病の日々、試練の日々、失敗を重ねる日々、信仰に迷う日々があるでしょう。しかし、主は私たちを決してお見捨てにはなりません。そして、「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈

るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(18:19-20)とされているように、仲間のうちの一人がダウンしているときには、それを支える信仰の友がいるのです。牧師も信徒の皆様のために祈ります。反対に、牧師も弱い人間の一人でありま
すから、心や体を病むことがあります。そういう日々、信徒の皆様
に祈られることが必要なのです。その祈りの中にインマヌエルの主が確かに居てくださる。

【結論】

ここにマタイ福音書の講解を終えます。しかし、これは始まりでもあります。主イエスの号令を受け、私たちは力強く世に出て行くのです。絶えず学び、絶えず交わり、絶えず宣べ伝えていきたいと思ひます。そのすべての営みの中に宇宙的權威を持つイエス・キリストがおられるということを忘れないでいましょう。

【祈り】

インマヌエルの主よ。この教会はマタイ福音書全体からあなたの教えを受けました。6年という時間をかけて多くの祝福にあずかることができ、感謝いたします。学んだこと一つひとつを思い返し、それによって自分の生き方が少しでも変わったかどうかを見直します。何度も振り出しに戻ってしまう私たちですが、それでも一歩ずつ前進してまいります。私たちの内に住み給う聖霊によって、主の号令を実行に移していくことができるよう励ましてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
揺れ動く信仰に確信を与え、復活の主の臨在を見出させ給う、父なる神の愛、
普遍的号令をもって、全歴史上の教会に、福音宣教の使命を語り給う、主イエス・キリストの恵み、
苦難の日々にも常に共にまし、インマヌエルそのものであり給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。